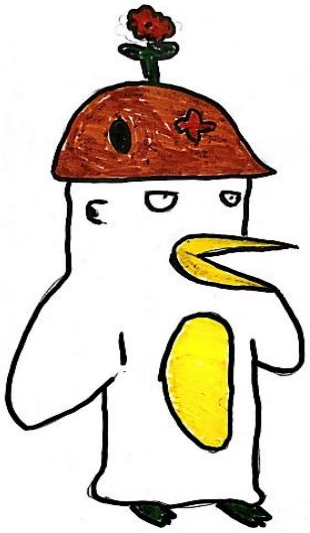


ふくしん と ポコスン

～　福祉と他機関との連携事例集　～

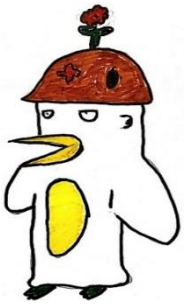
相模原市障害者自立支援協議会南区課題検討会

～もくじ～

2～5 ページ　　コンビニと福祉の連携事例

6～9 ページ　　警察と福祉の連携事例

10～13 ページ　学校と福祉の連携事例



～ 堀越部会長よりご挨拶 ～

相模原市障害者自立支援協議会の区課題検討会では、この数年間、障害福祉分野の支援者として当事者の方々と関わる中で感じた地域課題を共有し、その解決策について話し合ってきました。

地域課題には、各区に共通するもの、その区特有の地域性によるものと様々ありますが、南地区において活動する私達が最も必要で大切であると考えたのは、他分野との連携ということでした。そして、これまでに既に連携してきた機関を含め、他分野の方々に向けて私達から何かしら発信していくことが必要ではないかと気づき、その方法として事例集を作成することになりました。

地域社会の中の誰でも知っている「コンビニエンスストア」、「警察」、「学校」という３つの機関に焦点を当てることが決まり、私達の経験を形にする作業が始まりました。

ふくしん＆ポコスンという謎のキャラクターも誕生して、お互いを知ることの大切さについて考えてくれました。ぜひ、この事例集をふくしん＆ポコスンと一緒に読んでみて下さい。

～ キャラクター紹介 ～

紹介する事例をわかりやすく説明してくれるキャラクターたちです

ふくしん
FUKUSHIN

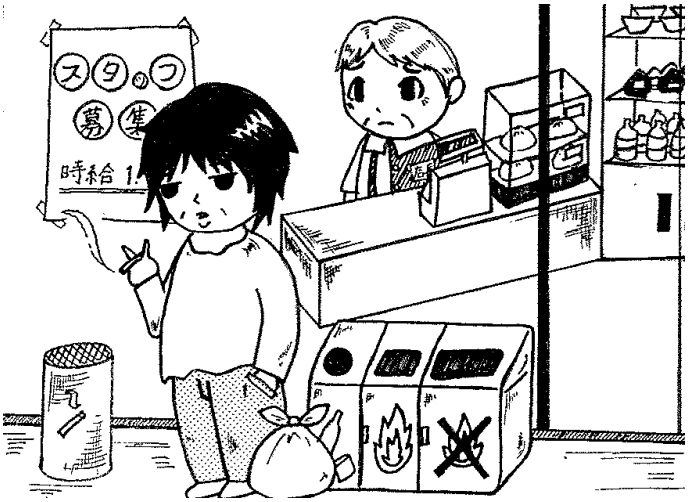
障害福祉に詳しい
お友達がいっぱいほしい
一緒に何かするのが大好き

ポコスン
POCOSUN

ふくしんのお友達
ふくしんが困った時に助けてくれる
ポリス、コンビニ、スクールの合体

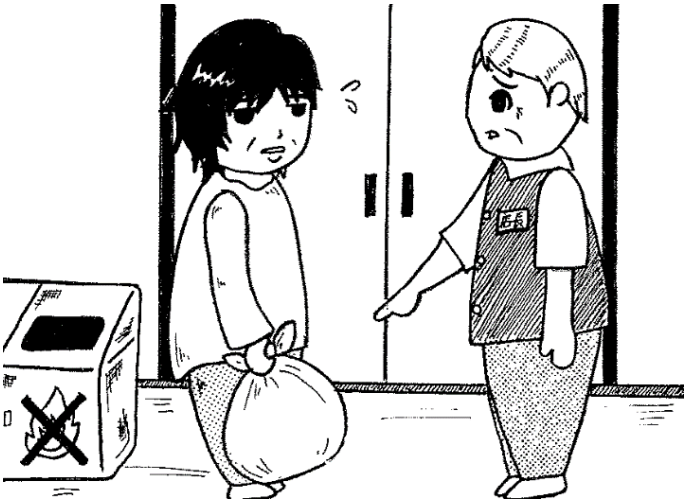
～ コンビニと福祉の連携 ～

A さんは障害者の※グループホームで生活しています。毎日近くのコンビニでタバコを吸っていますが、身だしなみが綺麗ではなく、家庭ゴミを捨ててしまうAさんに対し、店長は「困ったなぁ」と思っていました。

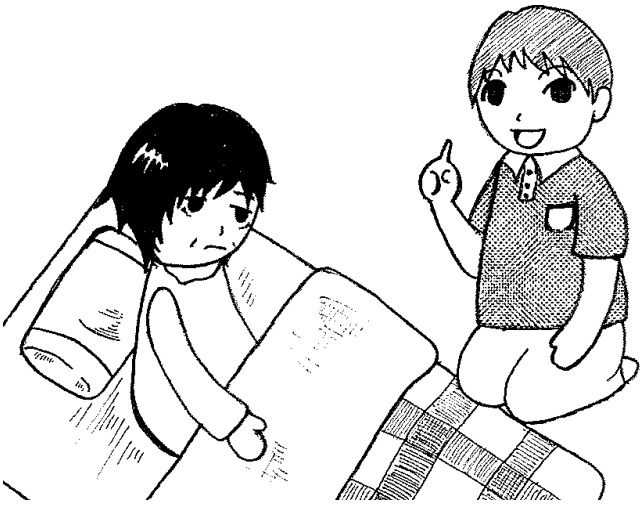


※グループホーム
⇒障害のある人が小規模な住居で支援を受けながら共同生活をしている。

ある日、店長は A さんにゴミ捨てのマナーを注意しました。A さんは何も言わずに、コンビニを去っていきました。注意を受けてから、A さんはコンビニに行かなくなりました。



コンビニでタバコを吸うルーティンが崩れた A さんは部屋に閉じこもるようになりました。グループホームの職員が声をかけたところ「コンビニに行きたいけど行けない」と理由を話しました。職員からの提案で、一緒にコンビニに行って、店長に謝ることになりました。



A さんは職員と一緒にコンビニに行き、ゴミ捨てのマナーが悪かったことを謝りました。店長もしばらく来ていない A さんを心配していました。職員からも A さんに障害があることやコミュニケーションが苦手であることを伝えました。

A さんは再びコンビニに行けるようになりました。店長も A さんを気にかけて、声をかけてくれるようになりました。

～ コンビニと福祉の連携 ～

Aさんにとってコンビニでの一服は
生活を安定させる大切な日課だったのかな？

一見、なんでもないように思えることに、
支援の大事なポイントがあったりするんだ。

店長さんは、ゴミの捨て方をお願いするつもりだったけど、
Aさんには、突然のことで厳しく聞こえてしまったんだね。

グループホームの職員が一緒にコンビニへ行ったことで、
Aさんが安心して生活するためになにが大切かを、
コンビニの店長さんに理解してもらえてよかったね。

Aさんとコンビニ店長が顔見知りになったし、
グループホームの職員と店長さんがつながったことで、
Aさんを助けてくれる仲間が増えたね。

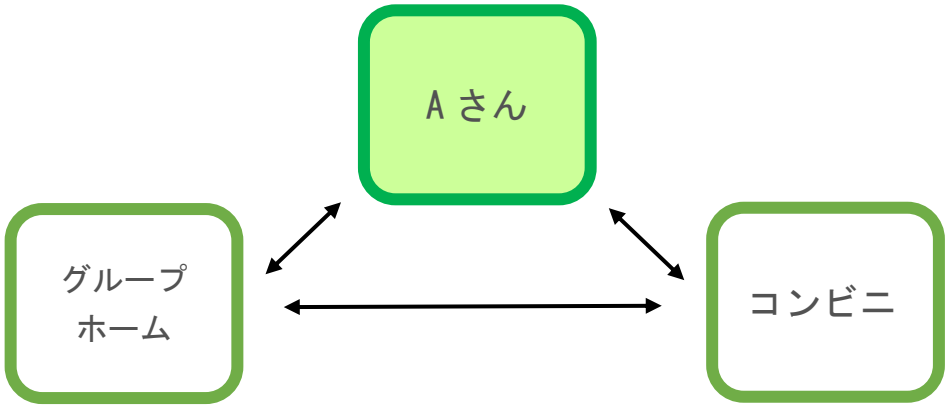
コンビニの店長さんという地域の見守りが増えたことで、
Aさんを取り囲む体制にプラスの変化が生まれたんだよ。

【　解　説　】

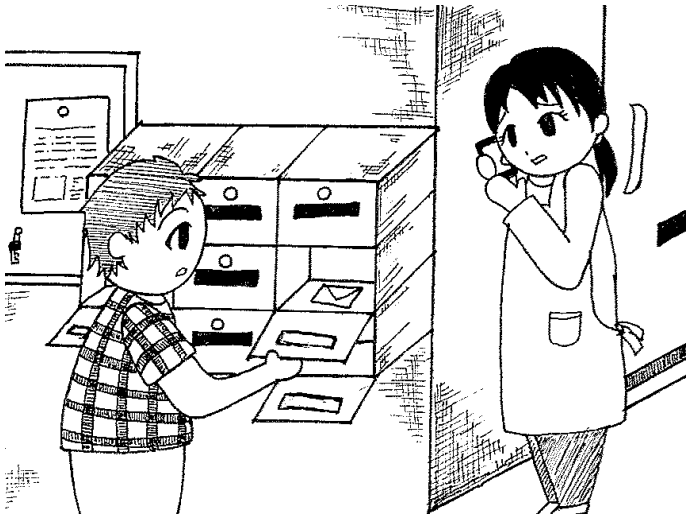
Ａさんは「コンビニでタバコを吸う」というルーティンがあることで、精神面の安定が図れていましたが、コンビニの喫煙場所に行けなくなってしまい、日課だった一服が出来なくなったことで調子も悪くなってしまいました。困っていたことを誰にも言えずに、調子を崩してしまったＡさんに気付いて、グループホームの職員が声を掛けたことで、コンビニでの出来事がわかりました。店長さんに一緒に謝りに行ったことで、店長さんとグループホームの職員さんが顔見知りになることもできました。コンビニは、単にモノを買う場所だけではなく、近所の大切な居場所です。そばにいる人達がつながることで、Ａさんにとってより安心して生活できる環境になったのではと思います。

こんな形だった相関図は・・・。

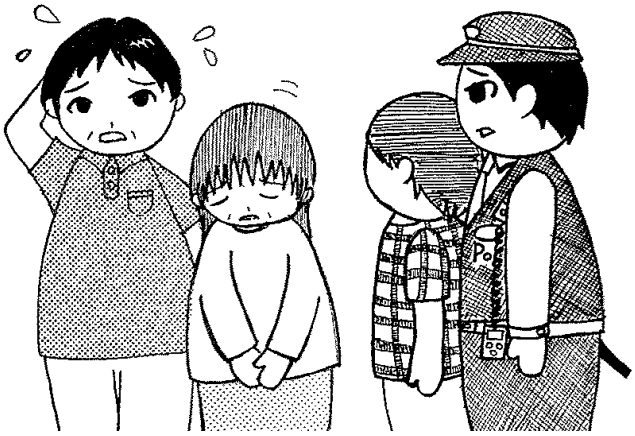
やがてこんな形の輪になりました。



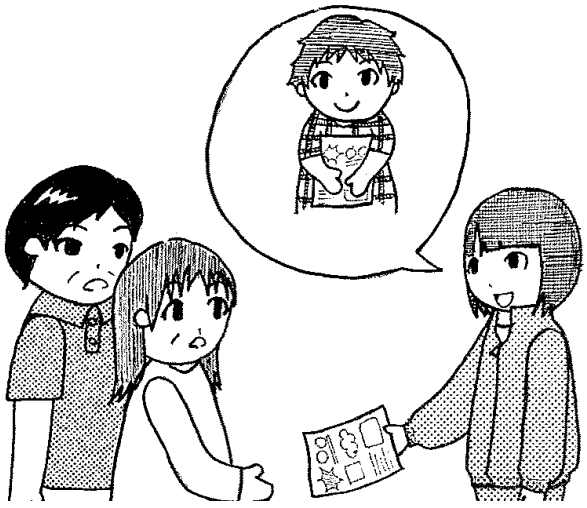
～ 警察と福祉の連携 ～



知的障害のある B さんは団地に住んでいます。いつも団地のポストを開けて回っていたため、団地住民がお巡りさんに通報しました。



お巡りさんはB さんを注意しましたが、ポストを開ける行為は続きました。困ったお巡りさんは B さんと B さんの両親にも注意しました。

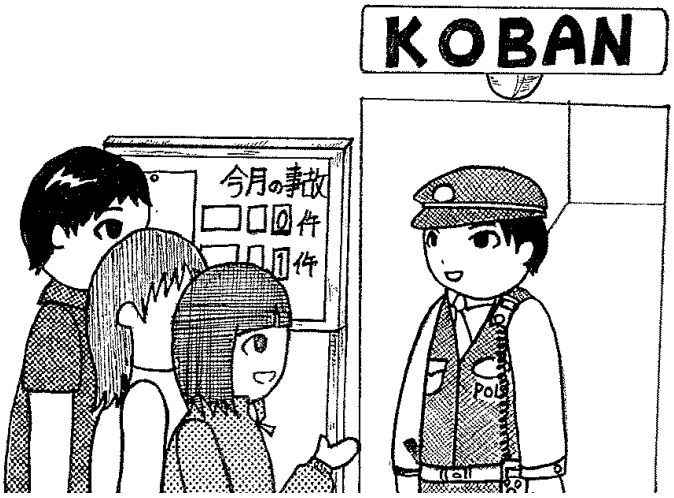


両親も B さんにやめるように伝えましたが、それでも繰り返してしまいました。困った両親は※障害福祉の相談員に相談しました。相談員が B さんの気持ちを聞くと、チラシが欲しくてポストを開けていたことが分かりました。相談員は B さんがポストを開けていた理由を両親に説明しました。

※障害福祉の相談員
⇒障害者の自立を支えるため、課題の解決や適切なサービスのマネジメントを行う。

相談員は B さんと一緒にポストを開けなくてもすむ方法はないか考えました。近所におばあちゃんが住んでいるので、チラシはおばあちゃんからもらうことになりました。

チラシをもらう方法はあっても、時々Bさんはポストを開けてしまい、通報されることがありました。相談員は両親と近くの交番に行き、事情を伝えました。



このことが交番でも引き継がれました。通報があったとき、お巡りさんからは「ポストを開けたら住民が困っちゃうよね。チラシはおばあちゃんからもらうんだよね」と B さんにとって分かりやすい声掛けをしてもらえるようになりました。

～ 警察と福祉の連携 ～

Bさんがポストを開けてまわっているのは
なにか理由があるのかな？

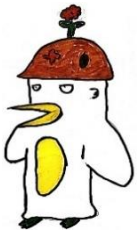
チラシを集めることにこだわる障害の特性が
あったみたいだね。

両親とお巡りさんが困ってしまったときに、
施設の相談員がBさんの話を受け止めたんだね。

Bさんのチラシ集めは否定せずに、
安心した団地での生活を続けていくために、
連携がはじまったんだ。

相談員とお巡りさんがつながったことで、
Bさんを理解してくれる相手が増えたね。

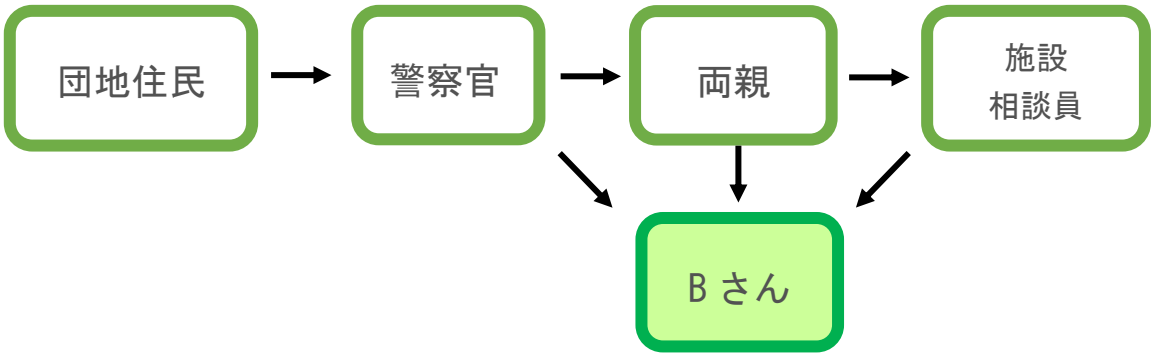
お巡りさんが見守りと声かけをしてくれることで、
団地住民もBさんに声を掛けやすくなったんだ。
Bさんが安心して暮らせる見守り体制が生まれたんだね。



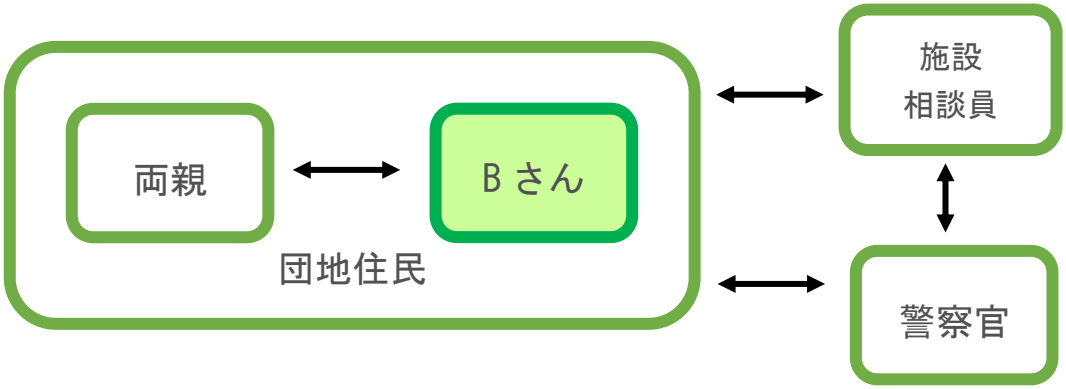
【 解 説 】

団地のポストを開けて回っていたＢさんを、不審に思った団地住民がお巡りさんに通報しました。それをきっかけに、お巡りさんは両親、両親は障害福祉の相談員、相談員はＢさんに話をしました。そして、Ｂさんがポストを開ける目的が「チラシ集め」であることが明らかになりました。障害特性とＢさんの目的をお巡りさんと共有したことで、見守りの体制ができ、分かりやすい声かけをしてもらえるようになり、おばあちゃんの協力もあって、Ｂさんはチラシ集めを続けることができています。不審に思える行動の理由を周囲に説明することで、障害に対する理解を深めてもらうことは、お互いに住みやすい地域づくりにつながるのではないかと考えています。

こんな形だった相関図は・・・。

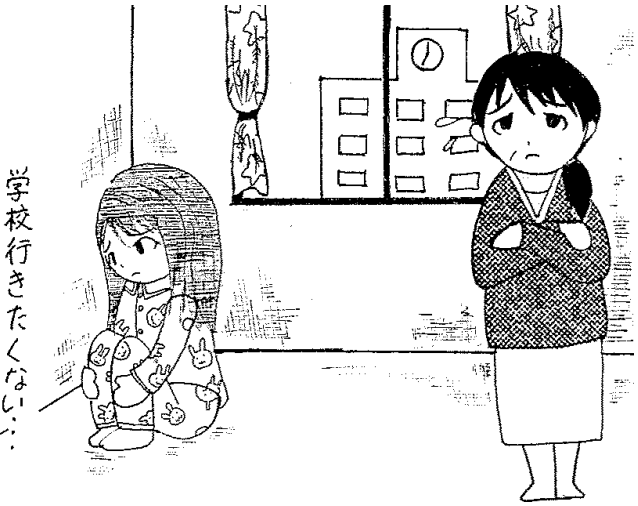


やがてこんな形の輪になりました。

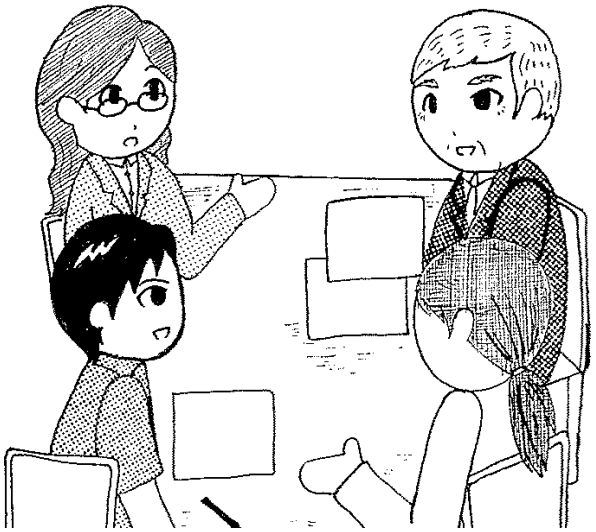


～ 学校と福祉の連携 ～

小学 5 年生の C さんは学校に通えていません。お母さんも頑張って登校させようとしましたが、だんだんと疲れてしまいました。なぜ C さんが学校に行きたくないのか、理由も分かりません。



担任が家庭訪問しても、状況は変わりませんでした。学校職員から、※青少年相談センターに相談した結果、※スクールソーシャルワーカーが支援していくことになりました。

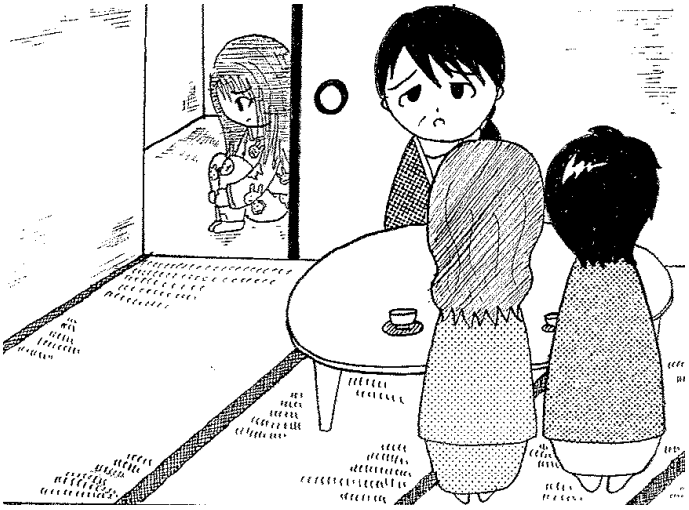


※青少年相談センター
⇒19 歳以下の全般的な相談（不登校、情緒・行動上の問題、交友関係、いじめ、家族関係、養育不安等）を受けている。スクールソーシャルワーカーとスクールカウンセラーを派遣している。

※スクールソーシャルワーカー
⇒学校や関係機関と連携・協働し、不登校等の解決に向けて福祉的側面から働きかけを行う。

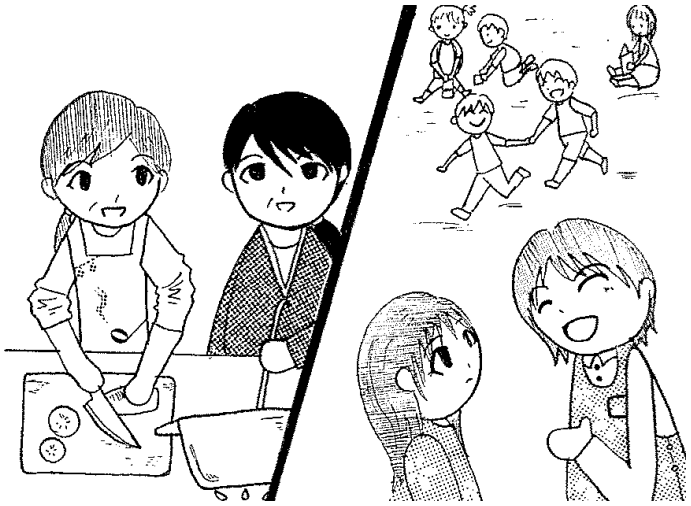
まずスクールソーシャルワーカーは学校職員と家庭訪問しました。そこで C さんの不登校にはいくつかの理由と背景があると見立てました。

- C さんが学校に馴染めないのは、発達障害の特性があるからではないか。
- お母さんは C さんの不登校に加え、支えてくれていたおばあちゃんが半年前に亡くなり、負担が大きくなっていた。それでもともとあった精神疾患が悪化して生活が崩れたのではないか。



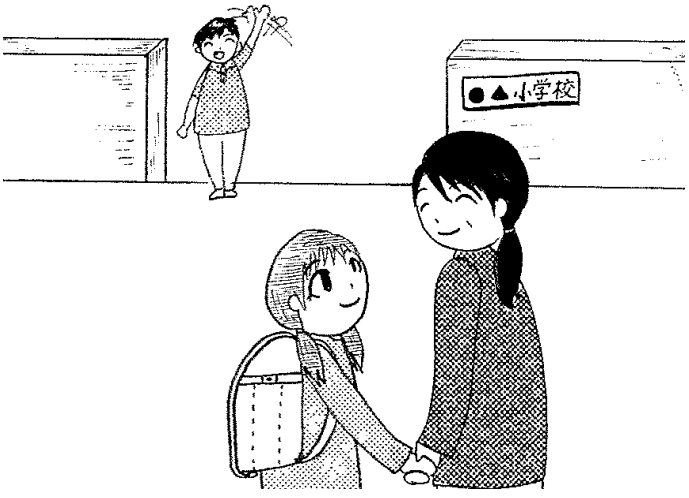
スクールソーシャルワーカーと学校職員で、課題の整理をして、お母さんとＣさんに福祉サービスの利用を提案する方針となりました。スクールソーシャルワーカーがお母さんと一緒に市役所の障害者相談窓口に行き、お母さんと Ｃ さんの福祉サービス利用について相談しました。

お母さんは※ヘルパーに来てもらうことで家事に取り組めるようになり、生活状況が良くなりました。Ｃ さんも学校での過ごし方を※放課後等デイサービスで練習することができ、少しずつ学校に行けるようになり不登校も改善されました。



※ヘルパー
⇒障害福祉サービスのうち、自宅における身体介護、家事支援や、通院等のための外出の支援をする。
※放課後等デイサービス
⇒障害や発達に特性がある学齢期児童に対し、生活能力向上の訓練や社会との交流を促進するための支援をしている。

さらに※保育所等訪問支援を活用し、学校と福祉による連携ができる体制になりました。今後も学校と福祉が協力して Ｃ さんを見守っていくこととなりました。



※保育所等訪問支援
⇒児童の発達に関する専門スタッフが保育所や学校等を訪問し、他の児童との集団生活に適応するための支援を行う。

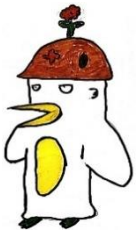
～ 学校と福祉の連携 ～

おばあちゃんが天国にいってしまってから、
お母さんは病気があるなかで、なんとか頑張ってきたんだね。

お母さんが頑張り過ぎて、余裕がなくなっちゃったことが、
C さんにも伝わっていたのかな。

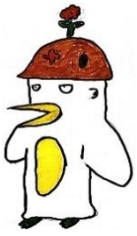
でも、支援者につながって、福祉サービスを利用すること
で、C さんは社会とまたつながることができたんだね。

お母さんの家事を一緒に手伝ってくれるヘルパーさんが
家に来てくれるようになったから、お母さんも安心だね。



困り感はあったけど、
どこに相談したらいいのか分からなかったんだ。

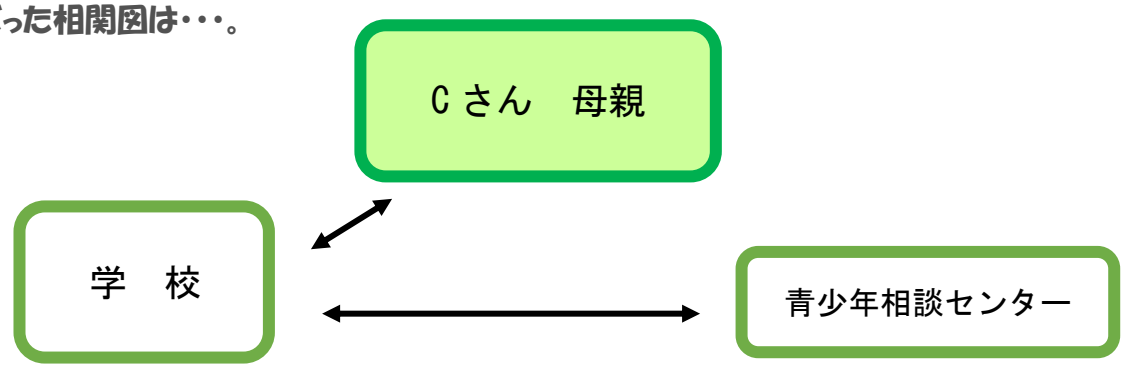
相談しづらいことに、周囲が気づいて声を掛け合っていく。
みんなでつながって、地域の課題を解決していきたいね。



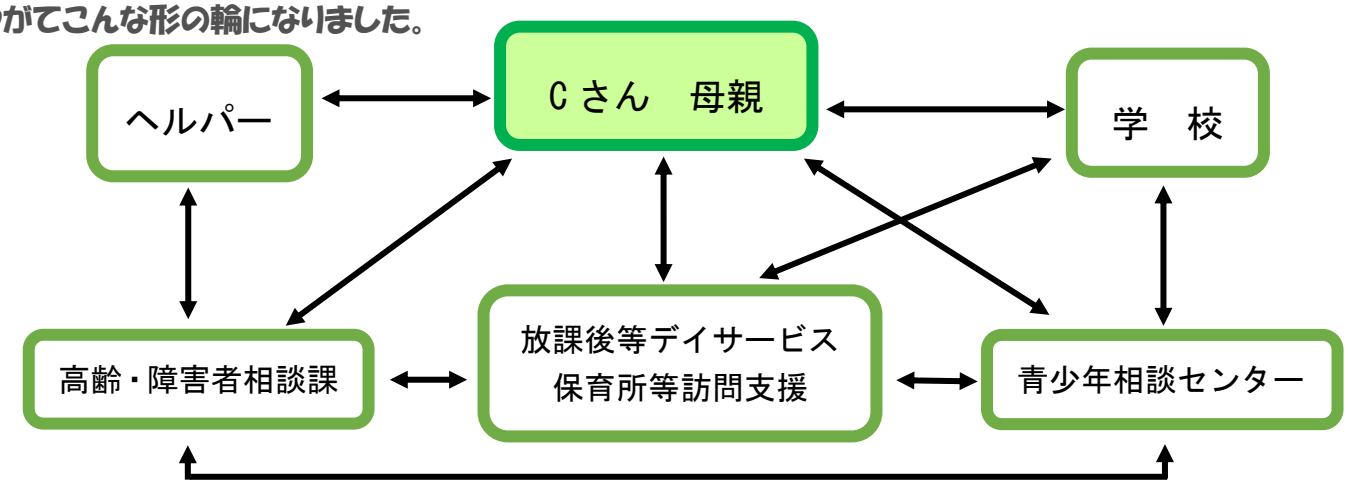
【　解　説　】

不登校をきっかけに、お母さんの病気やＣさんの発達障害に、必要な支援が届いていなかったことがわかりました。病気や障害で生活に困っている場合には、福祉のサービスを利用してよりよい生活ができるように支援を受けることができます。しかし、そういうサービスを知らず、言い出しにくくて相談ができずに、より厳しい状況で生活をせざるを得ない場合もあります。また、誰もが病気や障害を持つ可能性がありますが、困った状況になっても発信できない人もいます。周囲の人が変化に気づいて支援につなぎ、誰もが安心して生活できる社会を作っていくことができればと思います。

こんな形だった相関図は・・・。



やがてこんな形の輪になりました。



～ 編集委員名簿 ～

【事例作成チーム】

所　属	氏　名	備　考
相模原市立南障害者地域活動支援センター	堀越　恵美子	部会長
南障害者相談支援キーステーション	大島　美和	チームリーダー
らっく相談支援事業所	坪内　友美	
きらら相談支援事業	海老沢　直美	
東林間ホッとスペース「Piece」	矢盛　晶	
南高齢・障害者相談課	川﨑　麻依	事例イラスト作成者

【デザインチーム】

所　属	氏　名	備　考
就労継続支援Ｂ型事業所ブレンド	鈴木　恒介	副部会長
ワークショップ・フレンド	林　明子	チームリーダー
虹の家相談室	小泉　美喜	
相談支援事業所アウル	鎌田　かおり	
相模原市社会福祉協議会南区事務所	三枝　真澄	
大野南高齢者支援センター	藤井　駿平	

【事務局】

所　属	氏　名	備　考
相模原市	大貫　祝和	
南障害者相談支援キーステーション	加藤　俊雄	
相模原市社会福祉事業団	北澤　和美	

Special Thanks !

キャラクターデザイン

Tomonori Masuda

「ふくしんは福祉って感じでもないよね、

ポコスンはパトカーといろんな人の融合体だね」

この事例集に関する問い合わせ先

相模原市障害者自立支援協議会事務局
042-758-2121